

発 達 5-PB6

横に置いてあるだけで汚染される？

幼児における食物汚染の理解

外山紀子

(埼玉大学 非常勤)

コップの横にゴキブリを発見したら、そのコップの水はなるべく飲みたくないと思うだろう。たとえ汚染源との物理的接触がなくても、“汚染”を想定してしまうことを、連想による汚染

(Associational contamination) という。ここでは、幼児におけるACを4つの実験より検討した。

第1実験

Sb. : 大学生215名。

課題：6つの汚染源（ゴキブリ・犬の糞・塩・角砂糖・石鹼・カレー）が、(a)接触シナリオ「（ゴキブリ）がコップに落ちたが、すぐに取り出したので普通の水のように見える」、(b)近接シナリオ「（ゴキブリ）がコップの横にいたが水には触らずに歩いていた」、(c)非接触シナリオ「（ゴキブリ）がカバーがかかったコップの横にいたが、水には触らずに歩いていた」という3つのシナリオで提示される。被験者は、合計18ヶの各課題に、その水が汚染されたかどうかをこたえる（水を飲むとお腹が痛くなるか・甘いか・しょっぱいか・カレーの味がするか）。質問紙で実施。

結果：(1)近接・非接触シナリオでも、ゴキブリ・犬の糞については汚染がよく連想される。(2)この2者を比べるとゴキブリの方が汚染の連想が多い。→大人については、汚いもの・動くものについてACがよくみられる。

第2実験

Sb. : 4・5・6・7歳児各20名。

課題：4つの汚染源（ゴキブリ・犬の糞・砂糖・カレー）を3つのシナリオ（第1実験と同じ）で、写真を使って提示する。個別インタビューで実施。

結果：(1)シナリオ差について；全ての年齢群で、接触>近接>非接触という順でよく汚染が連想された（有意差あり）。つまり、汚染における物理的接触の役割については気づいている。(2)汚染源の差について；ゴキブリ・犬の糞>砂糖・カレーという差が6-7歳児では認められたものの、4-5歳

児では差がなかった。つまり、汚いものについてのみ汚染を連想するようになるのは6歳以上。

第3実験

「汚染源が動くかもしれない」という期待が、汚染の連想に関係するかどうかを検討。

Sb. : 4歳児20名、5歳児21名、6歳児27名、7歳児34名（以上個別インタビューで実施）、大学生258名（質問紙で実施）。

課題：汚染源は0-157。まず、0-157について10の生物学的属性（動くを含む）を帰属してもらい、次に接触・近接シナリオで0-157を提示する（子どもについては写真で提示）。

結果：(1)「0-157は動く」という期待と近接シナリオでの汚染の予測は6歳以上で関係するようになる（4-5歳児で関連なし）。(2)大学生では、生物学的属性の帰属総数と近接シナリオでの汚染の予測が関連がある。

第4実験

“見かけ”に惑わされることが、幼児における汚染の判断に影響を与えているのかどうかを検討。

Sb. : 3・4・5・6歳児、各25名。

課題：絵の具・ココア・砂糖の3つの汚染源を、接触・近接の2つのシナリオで、実演しながら提示。絵の具・ココアについては、接触シナリオで水の色が変わる。

結果：(1)絵の具については全年齢群で正しく、汚染が予測された。(2)3・4歳児は、接触シナリオで砂糖よりもココアについてよく汚染を連想した。

結論

(1)Associational contaminationは、大人については、汚いもの・動くかもしれないものについて選択的にみられる。(2)6歳以上の子どもについては、大人と同じ反応パターンがみられる。(3)3-5歳児におけるACは、汚染源に関わりなく一様にみられる。(4)見かけに惑わされることが、これに影響を与えている。